再会

～走る仲間　H.Tに捧げる～

柳瀬川ひろし

　雲一つない晴天だ。北よりの風はやや強くマラソン旗は時折激しくはためいている。片山はウインドブレーカーの上下にジョギングシューズという出で立ちで桂浜の入り口辺りにその応援旗を設置した。
《伊東さん、ようこそ高知へ。あとで飲みましょう》
　時刻は九時を回っている。すでに選手達は電車通りを東進し、はりまや橋に差し掛かろうとしている頃だろう。片山は悴んだ手に手袋をはめ、帽子が飛ばされないように、後頭部のベルトを締め直した。
　浦戸大橋を見上げる片山の背後で太平洋が静かにうねっているのが分かった。北よりの風はこの海岸では荒々しい海を形作らない。選手達は海岸線で風に苦しめられなかった分、運動公園に向かう残り六キロの内陸部で風に苦しめられることになる。
　彼はきっと浦戸大橋の頂上で小さくガッツポーズをすることだろう。そして、自らの故郷である伊豆半島の石廊崎で見た群青色の太平洋とこの太平洋は僅かな距離を隔てて繋がっているのだということを、おそらくは完走後の反省会で熱く語ることだろう。
　今年の年賀状には、
『念願だった龍馬マラソンを走ります。再会を楽しみにしています』
とあった。

　彼は、片山が川崎にいた頃からのマラソン仲間だ。片山の主催する駅伝チームに友人の紹介でやって来た彼は、長身のごく平均的なジョガーだった。しかし、駅伝で片山に目標タイムを言い渡され、ある程度のスピードを要求されるというそれまでになかった刺激を受けたのがきっかけだったのか、それ以後の彼は練習の虫と化した。数ヶ月後のマラソン大会では、片山が全くついていけないほどのスピードでゴールし余裕の笑顔で迎えてくれた。手には既に二本目のビール缶が踊っていた。
　彼はよく自筆の葉書や手紙をくれた。同じ年代の人間にしては筆まめと云える。その几帳面な性格は練習スタイルにも反映していた。
　大学ノートに練習の足跡をきちんと整理していた。それは、〖距離を踏むことこそが速さへの近道〗という単純かつ明快な信念で貫かれていた。
　その行為は、同じ場所同じアングルで毎日毎日デッサンを続ける画学生や、鍵盤に向かってゆっくりのテンポから徐々に速めながらスケール練習を毎日毎日繰り返す老ピアニストにも似たものだった。それは日々堆積され縞のようになって体と心に蓄積されていく。芸術家は例外なのかもしれないが、ランナーには蓄積が力となることが約束されている。しかし、簡単そうに見えて実はなかなかできないことなのだ。特に片山はそういう努力がずっとできないでいた。

いきなりの北風に応援旗が山肌に押しつけられるように撓み倒れた。片山は我に返って応援旗を頑丈に設置し直すと、時計に目を遣った。「１０：１２」そろそろトップランナーがやってくる頃だ。振り向くと海は暗くうねりさっきまでとは異なる表情を浮かべていた。西の空には帯状の雲が現れており、片山は風が強まらないことを願って大橋を見上げた。

警備員の無線音が風に乗って散り散りに聞こえてくる。先頭集団の通過が近いようだ。四年ぶりの再会まであと僅か。高鳴る胸の鼓動と沿道の応援がシンクロしたとき、見上げた大橋の灰色の路面にトップランナーの顔が見えた。晴れやかな笑顔が南国に春を連れてきたようで、アスファルトの路面に菜の花が咲き乱れたような輝きがそこら中に弾けた。

今年は定員を大きく上回る応募があり、片山は抽選にもれてしまった。片山は地元ランナーであり第一回大会から連続出場を果たしていた。やっと友人が来高することになった今回の大会だったのに、なぜ自分が抽選からもれなければいけないのかと、悔しくて悔しくて例年以上に練習に打ち込んだ。そのせいか暮れには膝を痛め大晦日まで全く走ることができなかった。

いつもは律儀な文字が並ぶ彼からの手書きの年賀状が、今年はなぜかワープロ文字だった。彼もついに老眼には克てなくなったかとおかしさがこみ上げてきたが、それ以上の感慨はなかった。龍馬マラソンで久しぶりに彼に会えるという喜びが、龍馬マラソンに参加できないという厳しい現実から私を解放してくれた。片山は応援者の目線で初めて彼の走りを見守るのだ。

十一月からの三ヶ月というマラソントレーニングのメニューを無事終えた伊東美幸は、自信をもってスタートラインに立っていた。

本来なら夫の正宏が走るはずだった。しかし、彼は五月の健診で引っかかった食道癌がすでに転移しており、十月下旬には息を引き取った。精密検査の結果、もって半年と言い渡されていたのだが正にその通りだった。夫には治療を最優先するためにと、思い切って退職を勧めた。夏休み前には職場を引き払い、親しい者にも退職の事実は知らせなかった。葬儀は家族のみでひっそりと行った。それは夫の遺言でもあった。もう一つ夫が言い残したことが、龍馬マラソンを代走してくれという無理な注文だった。

それまでの運動経験と言えば、夫とのテニスくらいであり、どちらかと言えば運動は苦手な方だった。夫が黙々と走り始めてからも、美幸は走ることに興味を引かれることはなかった。ただ、夫が仕事や子ども達に対して前向きに接するようになり、酒量もぐっと減ってきたことなどから、走ることを好意的に捉えるようにはなってきていた。そして、夫が語る走る仲間たちとのやり取りを何度も何度も聞かされるうちに、美幸にとって夫の走る仲間は実態をもった友人として意識できるようになってきていた。実際には一度も会ったことがないというのに。

正宏は病床で癌と闘いながら、十月には美幸のために三ヶ月でフルマラソン完走の練習メニューを作成した。そして、美幸が練習を開始するのを見届けると、パソコンで一人ひとりに当てた年賀状の文面を打ち込み始めた。意識が朦朧となり一文を打ち込むのに三時間を費やすこともあった。どうしても本人が打ち込みたいという相手以外は、美幸が正宏の言葉を聞き取り打ち込むこともあった。携帯電話のメールは、もっと早い段階から夫の言葉を美幸が代わりに打ち込んでいた。最期の二週間は正宏になったつもりで美幸が返信を送った。そんなこともあってか、親しい者にはほとんど気付かれることなく、二人きりで穏やかな別れの時間を過ごすことができた。

「美幸、初マラソンが県外とは優雅だね。こんなことになるなら、無理にでも誘って一緒に走る時間を楽しんでおけばよかったよ」

「私もメニュー通り練習しますから、あなたも元気になって応援してください。ゆっくりでいいから一緒に走りましょうよ」

正宏が息を引き取るまで、二人は何度となくこのような会話を重ねてきたのだった。

スタート直後から美幸はキロ六分ペースで正確にタイムを刻んでいた。

「はりまや橋が見たかったら左を走りや」
宿のおかみに予め教えられていたとおり応援の人波の間に垣間見たその橋はあまりに小さくて、夫に愚痴を言いたくなった。
「給水所には美味しいもんがいっぱいあるき食べ過ぎに気を付けや」
給水所に差し掛かる度に、前日の受付で上機嫌だった係のおじさんのとびきりの笑顔が思い出されて、食べ物に手を出した。
浦戸大橋をやっとの思いで上り切り、眼前に広がる雄大な太平洋を一望した時、「正宏さん、ありがとう」と自然につぶやいていた。思わず目頭が熱くなり視界がぼやけたその時、左手の崖に《伊東さん》の文字が大きく踊っているのに気付いた。
片山啓介とは一度も会ったことはなかったが、夫が大切にしていたレース後の写真ですっかり顔馴染みになっていた。健康そうに日焼けした肌や、帽子を取れば広いであろう額に写真の面影を重ねながら、初対面の彼になんと言って切り出そうかと、その時になって逡巡する自分に気付いた。このまま走り過ぎようかと見つめた片山と偶然視線が重なった。片山は不思議そうな顔つきで美幸のぶかぶかのランニングシャツに目を移し、ゼッケンを確認するような目でなぞっていた。コバルトブルーのランニングシャツは正弘が長年愛用していた物だ。

　片山ならきっとこのランシャツを見れば気付くだろうという思いは外れてはいなかった。片山の瞳に驚きの表情を見て取った美幸は、応援旗の前まで来ると足を止め、道脇に寄って片山に深々と頭を下げた。

　彼のスピードなら、遅くても十時三十分にはここを通過するだろう。しかし、十一時になっても彼はやってこない。大勢の集団に紛れて彼はすでに走り去ってしまったのだろうか。四年間の間に衰えてしまいスピードがにぶったのだろうか。何かアクシデントが発生し予定より遅れているのだろうかと片山は気が気ではなかった。
　十一時三十分を過ぎた頃、そのコバルトブルーのランシャツは現れた。人間の体型は変わるものだが、いくらなんでもこれは別人だ。長身だった彼がここまでサイズダウンするわけがない。片山は予め確認してあったゼッケンナンバーを目で追った。
　やはり彼のナンバーだ。
　片山はそのぶかぶかのランシャツを重ね着した小柄な女性ランナーと彼とを関連付けるものはないかと思考を巡らせ、その走りを注意深く観察した。その女性と視線が重なった瞬間、私は彼の年賀状に添えられていた一文を思い出した。
『嬉しいことに、最近妻が走り始めました』